

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K19960

研究課題名（和文）法華懺法の成立過程と展開に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental research on the process of establishment and development of the Hokke-Senbo

研究代表者

矢島 正豊（矢島礼迪）（Yajima, Shoho）

早稲田大学・グローバルエデュケーションセンター・助手

研究者番号：40906591

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では法華懺法の資料調査を中心に行い、先行研究で注目されていなかった関連資料を複数確認できた。これにより法華懺法の次第本の古本を平安後期まで遡って検討することができ、現行次第までの成立過程も明らかにできた。なお、本研究では法華懺法の展開として宮中での御懺法講にも注目したが、時間的な制約から成果は不十分であった。本研究では法華懺法の成立過程について、ある程度の成果が得られたため、今後、法華懺法の展開を考究していく中で御懺法講の検討にも取り組んでいく予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

法華懺法は平安中期以降、天皇家、公家、武家、寺家が関与する特別な儀礼であったと考えられ、仏教学や仏教史だけでなく多くの分野においても注目すべき研究対象である。しかし、これまでに法華懺法の詳細な研究はなく、成立過程も明らかになっていなかった。本研究によって成立過程が明らかになったことは学術的にも意義深く、この成果は今後、平安中期以降の法華懺法の展開を考究していく上での基礎となるものである。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the investigation of Hokke-Senbo 法華懺法 materials and was able to identify several related materials that had not been the focus of previous research. This made it possible to examine old manuscript of the Hokke-Senbo back to the late Heian period and to clarify the process of its establishment. This study also focused on the development of the Osenbo-ko 御懺法講 at court in order to examine the development of the Hokke-Senbo, but the results were insufficient due to time constraints. As some results were obtained on the process of the establishment of the Hokke-Senbo, I plan to examine the Osenbo-ko in the future as part of my investigation into the development of the Hokke-Senbo.

研究分野：仏教学

キーワード：法華懺法 法華三昧行法 如法懺法 御懺法講 瓦経 懺法 仏教儀礼

1. 研究開始当初の背景

本研究では、日本の仏教儀礼である法華懺法を研究の対象とし、その成立過程と展開を明らかにするための基礎的研究を行った。

法華懺法とは、日本天台宗を中心に修されている仏教儀礼で、その次第は中国隋代の僧智顛（538-597）が著した『法華三昧行法』に基づいている。『法華三昧行法』を日本へ将来したのは鑑真（688-763）であると考えられ、その後、最澄（766, 一説 767-822）が入唐により再度将来したことで、日本天台宗で特に重視されるようになった。同書は本来、懺悔と読経、坐禅によって「法華三昧」という境地を得ることを目的とした行法書であったが、平安中期頃になると自身の罪業を懺悔する悔過儀礼や死者の菩提を願う追善儀礼として修された記録がみえるようになる。儀礼としての法華懺法の実修は現代まで続いているため、日本において 1000 年以上修され続けている儀礼といえる。

法華懺法が長期間にわたって修され続けてきた背景には、法華懺法が各時代の権力と深く関わる儀礼であったという要因がある。例えば、平安中期の公家の日記には定期的な仏事や先祖の追善供養として法華懺法の法会が営まれていた記録がみえ、平安院政期の白河・鳥羽・後白河の三法皇の諸記録にも法華懺法の営為がみえる。特に後白河法皇（1127-1192）が宮中で催した法華懺法の法会、いわゆる御懺法講は、後に宮中儀礼となり、明治維新前まで法会を司った公家たちによって記録が残されている。

また、法華懺法の営為は天皇や上皇、公家だけでなく、武家にも浸透していた。『吾妻鏡』には、源頼朝（1147-1199）の追善供養として北条政子（1157-1225）が法華懺法の法会を催した記録がみえ、室町期にも足利義満（1358-1408）が参会した御懺法講の記録が残っている。さらに、前述の三法皇や源頼朝、そして鎌倉幕府二代執権の北条義時（1163-1224）の墓所がいずれも法華懺法を修する法華堂（法華三昧堂、懺法堂とも）であったことも法華懺法が各時代において重視されていた証左と考えられる。

このように、法華懺法は天皇家、公家、武家、寺家が関与する特別な儀礼であったと考えられ、関係する各分野において注目すべき研究対象である。儀礼を研究する際には、儀礼の記録を記した日記や諸記録、当時の文学作品などから多角的に検討しなければならないが、こと法華懺法に関しては各時代の政治や建築、美術、芸能などからも考究する必要がある。つまり、法華懺法は仏教学や仏教史だけでなく、多分野において注目すべき研究対象といえるのである。

しかし、これまでにいくつかの分野から法華懺法に言及した研究はあるものの、法華懺法を中心に据えた研究はない。上記のように法華懺法は多分野において注目すべき研究対象であるため、これまでも文学や芸能、歴史といった分野から言及した研究はいくつかあった。しかし、法華懺法そのものを研究対象とし、成立過程やその後の展開を詳細に扱った研究はないため、各分野からの言及も十分なものとはいえない状況である。よって、法華懺法そのものを研究し、その成立過程や展開を明らかにすることは、多くの分野の研究にも資するといえる。

以上より本研究では、法華懺法を研究の対象とし、その成立過程と展開を明らかにするための基礎的研究を行った。

2. 研究の目的

本研究では上記の背景のもと、以下 2 点を研究の目的とした。

1 点目は、法華懺法が儀礼として成立した過程を明らかにすることである。法華懺法が施主を伴った儀礼として催された記録は平安中期頃から確認できるが、智顛の『法華三昧行法』から法華懺法が成立する過程や現行次第の製作者は特定されていない。また、先行研究には、円仁（794-864）の伝記に示される記述から、円仁が入唐により法華懺法を将来したと捉えているものがあるが、円仁当時の次第本は現存していないため、伝記の記述が正確であるかは定かでない。したがって、本研究では儀礼次第の成立過程と現行次第の製作者を検討することを目的とした。

2 点目は、日本における法華懺法の展開を明らかにすることである。本研究では、特に宮中における法華懺法の法会である御懺法講に注目した。宮中における御懺法講の実修記録は平安院政期から江戸後期まで残っている。しかし、これまでに御懺法講を詳細に扱った研究はなく、その歴史的な意義も明確には定まっていない。御懺法講は長期にわたって催されているため、法会に関わった人物や法会の願旨を考究することで、各時代における御懺法講の役割や法華懺法の儀礼としての意義も考究できるはずである。もちろん、法華懺法の法会の記録は御懺法講以外にも多くあるが、本研究では御懺法講を法華懺法の展開のひとつとして捉え、儀礼としての意義を考究する。

3. 研究の方法

前述した 2 点の目的を達成するために、本研究では以下の方法で行った。

まず、1 点目の目的である「儀礼次第の成立過程と現行次第製作者の検討」については、資料調査を集中的に行い、そこから次第の成立過程や現行次第製作者の検討を目指した。上に述べた通り、法華懺法を主な研究対象とした研究はこれまでになかったため、関連する資料の調査自体が十分とはいえなかった。また、天台宗に関連する資料の現存状況に関しては渋谷亮泰編『昭和現存天台書籍総合目録』に詳しいが、同書は 1978 年の出版であり、既に 40 年以上が経過してい

る。そこで本研究では、『昭和現存天台書籍綜合目録』をもとに関連資料を調査・蒐集するとともに、同書には記載のない新資料の調査も進めた。具体的には、智顛の『法華三昧行法』の諸本、法華懺法の次第本、法華懺法に関する口伝書や注釈書類を調査した。調査場所は関西の天台宗系寺院や文庫を中心に行った。

次に、2点目の目的である「御懺法講の諸記録に基づく法華懺法の展開に関する検討」については、御懺法講の実修記録調査と一覧表の作成を目指した。本研究の申請時には、すでに御懺法講の初例が後白河法皇による法会で、最も新しい記録は文久3年(1863)甘露寺勝長記『前新朔平門院十七回御忌御懺法講申沙汰誌』(国立公文書館蔵)ということが判明していた。そこで本研究では、文久3年(1863)までの御懺法講の記録を調査し、出仕者や願旨などをまとめた一覧表の作成を目指した。なお、本研究は2年間という制約があったため、ひとまず上記1点目の目的である「儀礼次第の成立過程と現行次第製作者の検討」を中心に行い、ある程度目途がついた段階で2点目の目的に取り組むこととした。

4. 研究成果

(1) 各年度の研究成果

2021年度の研究成果

2021年度は、法華懺法の原典である智顛撰『法華三昧行法』の調査・蒐集を中心に行った。また、これに加えて、平安中期における法華懺法の儀礼としての意義の検討と、中国宋代の天台僧遵式(964-1032)が校訂した『法華三昧懺儀』と『法華三昧行法』の比較も行った。

まず、『法華三昧行法』の調査・蒐集については、事前調査で所蔵が確認できていた天王寺(東京)西教寺(滋賀)叡山文庫(滋賀)にて調査を行った。報告者は、本研究の前に東京大学史料編纂所所有の大原勝林院蔵『魚山叢書』(写真帳)を調査し、同叢書所収の『法華三昧行法』(写本)が現存する『法華三昧行法』の中で最も古い内容を伝えるものであることを明らかにしていた。2021年度の調査箇所では、それぞれで版本の『法華三昧行法』を調査することができ、校訂の結果、これらの版本が『魚山叢書』所収本に示される内容を底本にしていることが判明した。加えて、『法華三昧行法』の現存する諸本には異なる往生思想が示されているという問題点があったが、上記の諸本調査により、弥勒菩薩の兜率天往生を示す内容が原型に近いという推定もできた。これらの調査結果は下記論文にて発表した。

次に平安中期における法華懺法の儀礼としての意義の検討については、平安中期の天台僧鎮源撰『法華験記』にみえる法華懺法の記述をもとに当時の法華懺法に対する認識を検討した。同書は仏教説話集であるため、その内容は史実とは言えないが、法華懺法の記述が多く見えるため撰述当時の法華懺法に対する認識を知る上では有用である。よって、同書所収の各伝を分類し、内容を検討した。その結果、法華懺法は平安中期には自身のための行としてだけでなく、亡者の臨終行儀や追善儀礼として積極的に修されていたことが確認できた。検討の成果は、下記論文にて発表した。

最後に中国宋代の天台僧遵式が校訂した『法華三昧懺儀』と『法華三昧行法』の比較についてである。宋代天台の遵式が校訂した『法華三昧懺儀』は当時の中国天台に現存していた『法華三昧行法』の諸本を校訂した文献で、日本に残る『法華三昧行法』とは若干の文字の異同がある。法華懺法で用いられる唱句は『法華三昧行法』に基づいているため、先行研究では日本に残る『法華三昧行法』が『法華三昧懺儀』よりも前の形を残している可能性が高いと指摘されていた。しかし、『法華三昧懺儀』には刊行年が記されていないため、両書の関係は明確になっていなかった。そこで報告者は、日本天台の源信(942-1017)が当時の中国天台に送った二十七問の質問状と遵式の僧伝に注目した。その結果、遵式の校訂は源信の質問状が中国天台に届いた後に行われたと推定され、その校訂に質問状の内容が影響している可能性も確認できた。検討の成果は、下記論文にて発表した。

2022年度の研究成果

2022年度は現行の法華懺法次第の前段階に位置していると考えられる如法懺法の検討、並びに法華懺法の円仁改伝説の検討、さらに他分野の資料に残る法華懺法の次第本の調査を行った。

まず、現行の法華懺法次第の前段階に位置していると考えられる如法懺法については、報告者のこれまでの研究成果と併せて検討を行った。報告者は本研究を始めるまでに現行の法華懺法次第が平安院政期頃に京都の大原来迎院で修されていた如法懺法の次第と一致していることを明らかにしていた。そのため、2022年度は如法懺法に関連する文献をさらに調査し、行儀の特徴を検討した。その結果、如法懺法という名称は良忍(1073-1132)以前には確認できないことがわかった。しかし、行儀の詳細がわかる湛智(1163-1237?)記の『如法懺法行儀』を検討すると、良忍の如法懺法とも若干異なる記述があるため、現行の法華懺法次第に湛智が影響を与えている可能性が明らかになった。検討の成果は2022年度の学会にて発表し、論文は2023年度に刊行予定である。

次に法華懺法の円仁改伝説についてである。法華懺法を扱った先行研究には、円仁の伝記である『慈覚大師伝』などの記述から、円仁が入唐により法華懺法を将来したと捉えるものがある。そこで報告者は円仁の将来目録や入唐の記録である『入唐求法巡礼行記』に注目し、円仁改伝説を裏付ける記述がないか検討した。その結果、それらの資料からは円仁が法華懺法を日本に伝える

たとする明確な根拠は得られず、法華懺法の円仁改伝説には再考の余地があることがわかった。検討の成果は、論文にて発表した。

最後に他分野の資料に残る法華懺法の次第本の調査については、考古学分野で研究されている埋経資料の瓦経に注目した。これまでの法華懺法の先行研究では紙資料に残る次第しか注目されておらず、「法華懺法」と名を冠する次第本の古本は鎌倉前期までしか確認されていなかった。そこで報告者は、先行研究で注目されていなかった考古学分野の埋経資料に注目し、埋経資料の瓦経に法華懺法の次第本が複数現存していることを確認した。これにより次第本の古本を平安後期まで遡ることができた。また、瓦経に残る法華懺法の次第は、紙資料に残る法華懺法の次第や如法懺法の次第とも若干異なっていたため、これらの比較によって現行の法華懺法までの成立過程が検討可能となった。これらの調査は2022年度末に行ったため、成果の発表は2023年度に予定している。

(2) 期間全体の研究成果

上記各年度の研究成果をもとに「2. 研究の目的」で立てた2点の目的に対する期間全体の研究成果を以下に述べる。

まず1点目の目的である「儀礼次第の成立過程と現行次第製作者の検討」についてである。本研究において如法懺法の次第と瓦経に残る次第に注目したことで、現行の次第成立過程には少なくとも三段階あったことが明らかになった。すなわち、法華懺法の原典である智顛撰『法華三昧行法』から一部の唱句を抜き出して次第とした段階、第一段階の次第に『法華三昧行法』からさらに唱句を抜き出して追加した段階、第二段階の次第に『法華三昧行法』にはない次第が追加された現行の次第の段階である。第三段階の次第は如法懺法の次第と概ね一致し、それより前には同様の次第はみられない。よって、現行の次第は如法懺法の次第を祖型とする次第であり、その製作者は如法懺法と関係が深い大原来迎院の僧であった可能性が考えられる。この次第成立過程の詳細については、2023年度の学会にて発表する予定である。

また、法華懺法の円仁改伝説については、円仁の入唐に関する諸記録から、円仁と法華懺法を結び付けることには再考の余地があることがわかった。しかし、本研究では円仁が法華懺法を日本に伝えたとする伝記や記述の検討が十分にはできていないため、これらは今後の課題とした。

次に2点目の目的である「御懺法講の諸記録に基づく法華懺法の展開に関する検討」についてである。「2. 研究の目的」でも述べた通り、本研究では上記1点目の目的である「儀礼次第の成立過程と現行次第製作者の検討」を中心に行い、その検討にある程度目途がついた段階で2点目の目的に取り組むこととしていた。しかし、1点目の目的に関する資料蒐集や検討に時間を要してしまい、2点目の目的として目指した御懺法講の一覧表作成には至らなかった。ただし、御懺法講の各記録の所在はおおよそ確認できているため、今後、日本における法華懺法の展開を検討していく過程で御懺法講の一覧表作成にも取り組んでいきたい。

(3) 今後の課題

本研究によって、法華懺法の成立過程についてはある程度の段階を明らかにすることができた。もちろん、今回の研究で明らかになった法華懺法の成立過程は、現在確認できる限られた資料に基づいたものであるため、今後も引き続き資料調査を進め、検討をしていく必要がある。また、法華懺法が儀礼として成立した後の展開については本研究では十分に扱うことができなかった。今後は御懺法講の一覧表作成の他、様々な資料から法華懺法が日本においてどのように展開していったのかを考究していきたい。

【論文】

報告者は2022年度に改名を行ったため、下記論文では執筆者の氏名が一致していないが、同一人物による発表である。

矢島正豊「入唐僧円仁の見聞した天台儀礼 法華懺法との関わりを中心に」『印度學佛教學研究』71(1)、pp.49-53、2022年

矢島正豊「『答日本国師二十七問』と遵式校訂『法華三昧懺儀』について」『天台学報』64、pp.161-168、2022年

矢島礼迪「『法華験記』にみる法華懺法」『印度學佛教學研究』70(2)、pp.565-568、2022年

矢島礼迪「弥勒・弥陀信仰よりみる『法華三昧行法』と法華懺法」『東洋の思想と宗教』39、pp.41-56、2022年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 矢島正豊	4. 巻 70(1)
2. 論文標題 入唐僧円仁の見聞した天台儀礼－法華懺法との関わりを中心に－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 49-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢島正豊	4. 巻 64
2. 論文標題 『答日本国師二十七問』と遵式校訂『法華三昧懺儀』について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 天台学報	6. 最初と最後の頁 161-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yajima Norimichi	4. 巻 70
2. 論文標題 The Hokke Senb? Described in the <i>Hokke genki</i>;	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Indian and Buddhist Studies (Indogaku Bukkyogaku Kenkyu)	6. 最初と最後の頁 565～568
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4259/ibk.70.2_565	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢島礼迪	4. 巻 39
2. 論文標題 弥勒・弥陀信仰よりみる『法華三昧行法』と法華懺法	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東洋の思想と宗教	6. 最初と最後の頁 41-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 矢島正豊
2. 発表標題 湛智記『如法懺法行儀（抄）』について－嘉禄二年本の復元と行儀の特徴－
3. 学会等名 第64回天台宗教学大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 矢島正豊
2. 発表標題 入唐僧円仁の見聞した天台儀礼 法華懺法との関わりを中心に
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第73回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 矢島正豊
2. 発表標題 法華懺法の円仁改伝説攷 『慈覚大師伝』の記述と儀礼次第の成立
3. 学会等名 東アジア仏教研究会 定例研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 矢島礼迪
2. 発表標題 『法華験記』にみる法華懺法
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第72回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 矢島礼迪（正豊）
2. 発表標題 法華懺法の慧思撰述説について
3. 学会等名 第63回天台宗教学大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関